

歴史館だより

財団法人最上義光歴史館 Vol.3 平成8年3月発行



「長谷堂谷合戦図屏風」(左隻)

義光公生誕

四百五十年に際して



最上家第47代当主
最上義光歴史館顧問

最上 公義

戦国乱世の中で文治政治を続けていた為、勢力が衰退してきた山形の情勢を、切齒扼腕して悔しがっていた義光公は、家督を譲られてからは、武力を以ってその勢力の盛り返しに全力を尽くし、城下町の形成や産業の育成にも優れた才能を発揮して、日本国の五大大名に数えられるまでになりました。しかしながら義光公の没後、最上家は改易され、山形は小国となってしまいました。

このような残念な結果にもかかわらず、義光公が山形の基礎を築いたという功績を顕彰して、義光公の馬上の勇姿を型取った銅像や最上義光歴史館の建設並びに東大手門の復元などが進められました。

更に、今年には義光公の生誕四百五十年に当たりますので、それを記念して、各種の催しが行われていると伺っております。

山形の皆様は義光公に対し、これ程までに親近感を抱いておられることに感激すると共に最上家の子孫として誠に光栄に存する次第であります。

今後は、山形の皆様と共に山形の発展のために一層の努力をし、少しなりともお役に立ちたいものと念願しております。

最上義光の

文学活動について

山形大学教育学部助教授 名子 喜久雄

数年前にNHKの大河ドラマで放映された「伊達政宗」が、増幅してくれたとする説もあるらしいが、最上義光の評価は芳しからぬものらしい。

ところが、義光の同時代人の里村紹巴は、義光を「好士」（「風流人」と高く評したのであった。周知のように室町時代末から江戸時代初めにかけて連歌の第一人者とされたのが、この紹巴である。この人物は、単に風流の世界に生きただけでなく、信長・光秀・秀吉・秀次らと交わるなど、政治の世界との交渉のある人物でもあった。



▲慶長3年連歌懐紙

ところで、現存する義光の連歌懐紙の一枚に、慶長三（一五九八）年四月十九日に、紹巴と一座したものがある。初めの三句を示す。

おる花のあとや月見る夏木立

義光

古籐の見とりに明けやすき山

紹巴

時鳥まつ夜の戸ほそ雨晴れて

昌叱

紙幅の都合で、引用を避けるが、これは、「源氏物語」花散里巻を面影（背景として感じさせる）こととした一連の句と思われる。臘月夜内侍との一件から、弘徽殿大后方の一層の憎しみをかった二十五歳の源氏は、須磨への隠遁を決心する。それを行う前の五月二十日の夜、源氏は一夜多くの女性を訪れ、最後に花散里の邸へ赴く。そこで花散里とその姉の女御らとのあり様が面影となっている。いわゆる「物語取り」の句である。

このような句を見ると、義光の古典文学への教養の深さを認めるのである。単なる武人とはとても思えないのである。なお「昌叱」は、紹巴

の女婿で、プロの連歌師。

それでは、義光はどのようにして、自身の古典教養を形成したのであるうか。一つの答えとして以下のようなことが考えられる。

連歌師たちは、単なる連歌の上手たちではなくて、「源氏物語」・「伊勢物語」・「古今集」などの古典作品の講釈の専門家であったことは、周知のことであろう。おそらく義光も、京でそのような講釈の場に列したであろうことは、容易に考えられる。

とはいえ、この答えで十分とは言えないと思われる。義光が滞京できたのは、その晩年であり、それまでに「源氏」などに触れることはできなかったかということが問題となる。

そこで浮かび上がるのが、最上家の代々の菩提所とされて来た「光明寺」の存在である。

光明寺が開山された十四世紀末に、それにかかわった、都の文人が山形を訪れている。

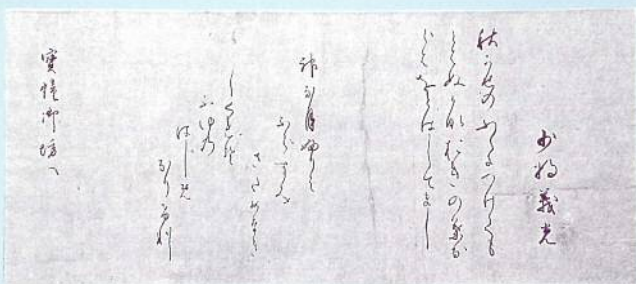
その人物を梵灯庵という。俗名は朝山師綱。出雲の人で、足利三代將軍義満の側近の一人であったとする。在俗時より連歌の名人との評が高かったが、どうしたことか出家し、後には、西行のごとく各地を放浪したとされる人物である。

出家したとはいえ、梵灯庵を迎えた山形側の僧俗の人々が、この機会に、梵灯庵と連歌を巻くことを望んだと考えることは、空想の段階に止

まらないと思うのである。

開山の折のそのようなことが、細々とあるのかもしれないが、好文の寺風を作り出していたならば、義光の少年時代からの教養の形成に何らかの助けをしたと考えることは許されるように思うのである。

徳川家康や伊達政宗の教育を僧侶が行ったように、最上家の嫡男として生を受けた義光を、光明寺（とは限らないのだが）に代表される最上家に縁ある寺院の僧が訓育したと考える可能性はあるのではなからうか。その時に、将来の政治家としての教育の他に、和歌・物語などを教養として学んだことを想像するのである。以上、やや想像が交ったが、義光が古典文学への関心を持っていたことは、間違いないことであろう。



▲古歌2首による消息。義光の文学的教養とすぐれた感性がうかがわれる。

山形従役詩に出てくる

最上義光

山形県立博物館嘱託 川瀬 同

英風千古快心胸 散步時尋虎将蹤
四十八城何處是 秋高天半玉蟾峯
右に掲げた七言絶句は、藩主水野忠精の山形初入部に従った塩谷宕陰の詩である。

水野忠邦が天保の改革失敗の責めによって、二万石召上げられた上、隠居を仰せつけられ、塾居謹慎を命ぜられたのは弘化二（一八四五）年九月であった。嫡子忠精（当時金五郎）は家督として五万石を賜った。山形へ所替を仰せつけられたのは、同年十一月晦日であり、ときに忠精十四歳であった。

◆宕陰に輔導を託す

忠邦は宕陰を信頼し、侍講に任じて講義をさくだけでなく、政治上の意見まで徴してきた。宕陰の学殖もであるが、その直言を愛したからであった。宕陰を召し、直々に忠精の輔導を託した。宕陰は感泣してお受けした。

初入部には、忠精は領内の村々を巡見し、高年のものに真綿一包みずつを自ら与え、付添の者へ孝養を尽くすべき旨を諭す。その間、領内の自然、人情にも直接触れるわけである。付き従う宕陰にとって輔導の絶

好の機会であった。忠精の初入部は嘉永二（一八四九）年八月七日山形着。時に忠精十八歳、宕陰四十一歳である。因みに翌三年五月山形出立までの十か月間に、宕陰は山形従役詩二十一首、浴澤遺香五十三首、計七十四首を作詩している。

◆雑詠（「山形従役詩」より）

各人が読み、あるいは吟じ、味わって頂いた方が良いと思うが、浅学を顧みず蛇足を添えてみる。

英風千古、心胸に快し。

散步して、時に虎将の蹤を尋ぬ。

四十八城何れの處か是れなる。

秋高し、天半の玉蟾峯。

○雑詠―特に題を設けない詩

○英風―英雄の面影 ○虎将

―最上義光 ○四十八城―義

光支配下の城 ○天半―空の

半ば ○玉蟾峯―月山（玉は

美称、蟾は蝥蛄、月に住むと

いう伝説による）

出羽の英雄最上義光の面影

は、消えることなく、我々の

心に永遠に快いものを残してくれている。領内の山形を取



▲山形城二の丸と西方の山並み

りまく山の峯々。村里を歩いて、とくに虎将義光ゆかりのあとを尋ねる。義光の支配下にあったという、最上四十八館の古城は、今いずこに、またどうなっているのであらうか。ふと空を仰げば、秋の空は高く澄みきっている。その中空に、なだらかな稜線を画く月山が、くつきりと浮かびあがっている。こんな意であらうか。

◆九月四日の詩（「山形従役詩」より）

お供をして神尾（西蔵王高原）に登り、山形城を望んだ九十八句に及ぶ五言古詩である。そこでは、義光が版面を抜け「提封（知行地）百万石」にいたる様を叙述し、義光所縁の地山形に就封した意義を考え、「君臣心力を協せ、文武本原を究めん。」

「志高ければ境常に広く、政清ければ国自ら尊し」とし、「請ふ看よ義光公、一族俄に鳳鸞するを。」最上も水野も同じ清和源氏の出であることを、「俱に是れ清和の源」といい、「清源涌きて竭きず、野水流れて汙はたり」と結ぶ。

これによれば、宕陰は英雄義光を偲ぶとともに、義光をひいて青年藩主忠精を励まし、藩債により人扶持（一人一日玄米五合）に喘ぐ水野家中に対し奮起を促したものでろう。

他の詩では、樵沢に立寄ったとき大雨にあい、公は乗り物を捨て草鞋傘で歩む、泥道は滑り突き出た石は固い、一年中土を相手の農民の苦勞は、たかが半日の我々の泥中を歩く苦勞とは比べ物にならない大変なものであると唱う。また、公は白倉山で自ら採った五本ひと塊の松茸を、江戸の忠邦に献せんとする。その孝思に宕陰たちが感激する詩もある。

◆宕陰（文化六）慶応三

水野藩内科医桃蹊の子として、江戸愛宕山下に生まれる。十六歳で昌平齋に学ぶ。天保二年父没したとき、朝夕の墓参りは百余日を越した。師の松崎慊堂は宕陰の窮迫を憐み、忠邦に説く。儒官に擢でられる。清水赤城に兵学を、槍術を上原源兵衛に、また馬術も学び、「予は士なり、死して儒林伝に入るを願わず」と語っている。文久二（一八六一）年幕府儒官となり、昌平齋で教授す。慶応三（一八六七）年没。五十九歳。

'95
~
'96

今年度の イベントから

企画展「鉄と火と水と」(5/22~6/4)

▲山形在住の刀匠、上林恒平氏の作刀を展示。5月5日、子どもの日、刀をきたえ形をととのえる「火造り」の実演は、晴天に恵まれて、見学者さつと800人。



企画展「戦った男たちの砦」

(9/20~10/29)



歴史講演会(9/9)
「肖像画に見る戦国時代の人びと」



▶講師は二木謙一先生。国学院大学文学部部長。戦国風俗文化研究の権威。大河ドラマの時代考証などでひっぱりだこの先生が、スライドを用いて、鑑賞を傾けてくださいました。はじめて知ったさまざまな風俗習慣のかずかずかに、驚きの声も。

復元された長谷堂城大手門

▲400年の歳月を越えて偶然にも残った2枚の扉。戦国山城の扉の扉としては、おそらく全国ただ一点...と言われています。復元は古材を集めて、山辺町の勝村建設さん。

最上義光を学んで

平成7年11月17日(金)

〈於 金井中学校・県社会科研究協議会〉

出羽合戦と

義光

義光は、生まれながらに武勇に恵まれ家康からも信頼されていて関ヶ原の合戦では東軍につき、勝利を収め五十七万石となりました。しかし、ここまでくるには、とても困難がまちうけていました。なんといつても出羽合戦は、義光の一生の大仕事だったんじゃないかなあと思います。江口光清のがんばりもむなく畑谷城は直江軍に落とされ、長谷堂城へとおいつめられながら必死に攻防しました。ほくは二つの城跡に登ってここで戦った武士や農民たちのことを思うと、その苦しさは少しわかるような気がしました。

古沢 潤

今も残る

義光の業績

「最上義光」。私はこの名前を耳にしたことはありませんでしたが、実際にどんな人物なのかは知りませんでした。しかし、社会科の授業を始めてから義光に対しての興味や関心がどんどん深まりました。商工業について調べてみて最も驚いたことは、義光の時代から始まっている「初市」「植木市」が今でも盛んに行われていることです。毎年、何気なく見に行っていました。まさか義光の時代から続いているものだとは思いませんでした。

もう一つは、職人町です。その職人町の名前には一つ一つ意味がこめられており、戦いのための軍需品や日用品を頑張って作っていた様子が目に見えます。そして城下町づくりに力を入れた義光の意気込みが伝わってきます。みんなで最上義光という、山形の戦国時代の人物を調べて、いろいろなことがわかって楽しい授業でした。

吉田 佳織



◀1600年の関ヶ原合戦のとき、山形城を守るために戦って300人余りが全員戦死した畑谷城。今も残る巨大な堀を、やぶを漕ぎ分けながら、幅や深さを調べてみました。

子ども講座「古城跡探検」

10/4



▲山形城を中心に8つの城を。化財、遺物などを展示。めつ、開され、たいへんな好評をい



▲最上義光公生誕450年のスタートイベント。会場は入り切れないほどの大盛況。パネリストは、山大教授横山昭男、県芸文会議理事佐々木悦、山大助教授名子喜久雄、青年会議所直前理事長高橋稜の各氏。義光公の人と業績に新たな照明が当てられました。

生誕四五〇年フォーラム「最上義光を語る」(1/13)

戦乱の時代に 生きた義光

義光をはじめとする戦国の武將はなぜ戦ったか、そしてなぜ国づくりに力をつくしたかについて、授業中にみんんでいろいろ意見を出し、話し合っていました。この二つの答えは同じことだと僕は思います。それは自分とその国をつぶされないようにするためです。戦国時代は自分以外の誰もある時は敵となり、ある時は味方になるという油断のできない恐ろしい時代でした。

そんな激動の時代に領地をもった武將は、少しでも領地を増やしたいはずですから、そのために周りの敵をうち破らなければなりません。そして手に入れた領地を豊かにして国づくりに努め、繁栄させていったのです。義光は自分の肉親さえも犠牲にして国を守り、発展させていかなければならなかったのでしょう。戦国武將もいろいろと苦労したのでしょうね。

松浦 伸太郎

残念な結末 義光の死後

私が最上義光の最上家のことを調べて考えたことは、優秀な指導者がいないと家臣たちがバラバラになってしまうということ、指導者と家臣たちの信頼関係がなかったらいい国にはならないということ。義光の死後、家親も義俊も頑張って家臣たちも協力していたらどうなっていたら、今の山形はどんな風なだろうと考えるとおもしろいです。また、義俊がもし十二歳ではなくもつと成長していたら、家臣たちの党争がなかったら本当に仙台をもしにく素晴らしい街になっていたのではないのでしょうか。

偉大な義光の死によって、くずれていく最上家のもろい部分と人間の無力さを調べているような気がして悲しくなりました。党争で改易された最上家を義光はどんな思いであの世から、見守っていたのでしょうか。

武田 さなえ



「義光の生き方」 を探って

生徒達は、変化と躍動感のある戦国時代が好きである。そこで活躍した人物は、たくましく潑刺と生きていくようにみえる。大河ドラマの「秀吉」は生徒達にも人気がある。

しかし、郷土の戦国武將であった最上義光のことを知っていた生徒はわずか数名であり、霞城公園にある銅像を武田信玄だ、と思っていた生徒もいたのである。

そこで、山形県社会科研究協議会の授業研究にあたり、最上義光は戦国時代をどう生きたか、という課題のもとに、各自の興味関心に基づいて調べる学習に取り組んだ。項目は、生涯と戦い・政策と業績・家族関係・秀吉や家康との関係・義光の死後等であった。

生徒達は史料をもとに、歴史館や他の史跡を訪れ、驚くほど意欲的に活動した。私は生徒の偉大なエネルギーに圧倒された。その調査結果の発表のあと、生徒達には成就感とともに、戦国武將として厳しい決断をしながら生き抜いて山形の土台を築きあげた義光の生き方が、鮮明に印象づけられたと思っっている。

指導者・金井中教諭

後藤 和代

最上義光の

肖像画のことば

山形市教育委員会文化課長補佐 布施 幸一



▲「山形県史談」所載「最上義光像」

その面貌は、やや面長、眉毛太く、一点を見つめているかのような目、鼻筋がとおり、口は小さく、頬・顎・口辺にひげをやし、なかなかの男ぶりである。一見して気品が感じられる武将像である。

紀伊守像（清源寺蔵）を初めとして、当時の武将の肖像画を見れば明らかである。ちなみに、坂像に見る上置が高麗縁であり、義光像のそれには菱形の中の黒丸が省略されている。

第二は頭に被っている烏帽子である。侍従（従五位下）以上の料は直垂に風折烏帽子となるが、本図に見るそれは立烏帽子に近い。風折にしては頂点が後方に折れて不自然である。左右どちらかに折れるのが風折である。本図に描かれた烏帽子は、兜着用の際の捲烏帽子（引立烏帽子）にも見えるが、絵巻や他の絵画資料には見られない異形のものである。

第三には直垂の紐である。袖先の紐、いわゆる露はやや太線で描き込まれているのは認められるものの、胸紐は短くしかも結目が粗雑である。直垂の胸紐は布の丸打ちで、一般的には「みぞおち」下辺まで伸びて二つ輪結びとなる。

第四には腰刀である。柄の部分を出絞とし、縁と縁頭と目貫をいれたいわゆる式正の料であるが、鐔が付いているようにも

見える。仮に、鐔が付いているとすれば、これば鐔のない合口拵となるのが正しいことになる。

以上のことから、本肖像を最上義光時代のものと認めるには無理がある。もし『山形県史談』にいう原画を転写したとすれば、原画の作期はどう見ても江戸後期を溯らないであろう。と同時に、武家故実をよく知らない絵師や依頼者像がひとりてに浮かび上がってきたであろう。

しかしながら、面貌は名門の近世大名に相応しく見える。それを生かして、当時の時代考証を踏まえつつ「平成の義光肖像画」を復元することもあながち無駄ではない。かえって夢があつて良いのではなからうか、などとあれこれ思い巡らしている昨今である。

ここに一枚の肖像画がある。最上義光の画像といわれているもので、明治二十五年に出版された『山形県史談』なる書に掲載されている。その凡例には、「本書二載セタル書画ハ凡テ正確ナル画像及ビ木像ニヨリテ転写セルモノナリ」（傍点筆者）とあるから、何か元になる画像があつたらしい。

現今ややもすれば、これが義光の肖像として一人歩きしないわけでもない。しかしである。この図あるいは原図が粗雑であるかどうかという議論はさておいて、有職故実や風俗史等の専門的視点から考証を試みれば、本肖像画にはいくつかの問題点がある。

紙面の都合上、今ここで詳細に言及できないが、大まかには次の諸点が上げられよう。

先ず第一に、この時代に武将が威儀を正して座するには、正座ではなく胡座が基本であること。同時代の坂



▲県指定文化財「坂紀伊守画像」（清源寺蔵）

迎春花

山形女性歴史サークル 村山 いく

厳寒の季節も過ぎ、花の訪れも間近い今日この頃、この季節になると昔山形城跡でお花見をした幼いあの頃がいつか思い出される。あれは確か昭和十年頃だったであろうか。あの頃の山形は秋が短く冬長く、雲から雪となり、毎日飽くことなく牡丹雪が降り続き、旧三月の「雛祭り」がきても、春とは名のみ、外で遊ぶつく日がなかなかやって来なかった。屋根より降した雪が窓を塞ぎ、昼でも薄暗い部屋の中で、買ってもらったばかりの毬を抱えて、いつになつたらこの雪が消えるのだからかと、降りてくる雪を恨めしげに毎日眺めていた幼かったあの頃を今でも鮮明に覚えている。

けれどあの広い練兵場（現在の城南周辺で塹壕が掘られ兵隊さん達の演習場だった）のクローバーが一面に萌えたち、やがて四方の山々が雪の帽子を脱ぎ捨てる頃、北国山形にも漸く春が訪れた。

城春にして草青みたり
現在の霞城公園は昔「山形陸軍歩兵三十二連隊」の在った処で、東大手門あたりには常時歩哨兵が立っており、一般の人々は隊内に入ることが出来なかつたが、年に一度だけ開放される日があつた。それは四月二十九日の「軍旗祭」の日で、昔からこの日は天気恵まれ土手の桜が満開になる頃でした。

朝、連隊のラツパの音が、町中の人々に届けよとばかりに鳴り渡ると、待ちかねたとばかりに手に手に手作りの料理の一杯詰まつた重箱、一升瓶も忘れずに、莫莖とを持ちして濠の橋を渡り、皆いそいそと連隊の中に入つていった。

満面に湛える濠の水、見上げるばかりの苔むす石垣、土手を巡って爛漫と咲く花の下で、各々家族ぐるみの「花見の宴」が開かれた。

美しい花を賞で、盃を傾け

風情を楽しむ等という風流なものではなく、酔えば必ず「花の山形、紅葉の天童」と唄が流れ、どの筵からも手拍子が賑やかだった。

「軍旗」を祀る儀式あり、兵隊さん達の仮装行列あり、隊内は自由に見学が出来、どの兵隊さん達もこの日はほかりはほろ酔い機嫌で、子供たち相手に楽しく遊んで呉れた。

私も顔見知りの兵隊さんに「酒保」（隊内の売店）で餡のはみ出した私の顔くらい大きい大福餅を買って貰うのが何よりの楽しみでもありました。

あの頃既に母は亡くなつていたが父はまだ元気でした。春風に誘われてか花片がはらはらと音なく舞う花の下で、酔うて気持ちよげに眠る父の傍らを、二人の姉がじつと見守つていたのが、今でも目に浮かんでくる。

やがて真つ赤な太陽が、西

の山々を茜色に染める頃、再びラツパが鳴り、人々は名残惜しげに「来年まで達者で」と歩哨兵に声をかけながら各々家路についた。

うららかな春の日差し一杯の、楽しい一日でした。そして世の中は平和でした。

昔々出羽百万石と言われた程の繁栄を示した城主、最上義光公もこの花の下で、綺麗どころを待らせ、家臣と共に我が世の春を謳歌し、花見の宴を催したことでしよう。又この花が散る頃遠く「戦場」に行くんだと言つていた若い兵隊さん達。そして現在、城跡内は「霞城公園」となり新しく東大手門もでき、いつでも誰でも自由に入出入り出来るようになった。歴史は移り世の中は変わり、懐かしい昔をしのぶすべもないが、僅かに残る濠の水と、石垣と、春を告げる土手の桜のみが昔日の面影を止めるのみとなりました。

今年もまた花の季節がまもなくやってこようとしている。城跡の桜も、訪れる春を忘れずに又咲き競う事でしょう。

惚びつつ
城址に春を惜しみけり
郁

短歌

天駆ける

山形市芸術文化協会常任理事

高橋 光 文

長谷堂に直江兼統を遣え撃ちし

雄叫び聞こゆ天駆ける騎馬

義光公書状の直き文字かなし

駒姫も若き義康の死も

白壁に菊花に柔く日の差して

大手門くぐる園児らはしやぐ

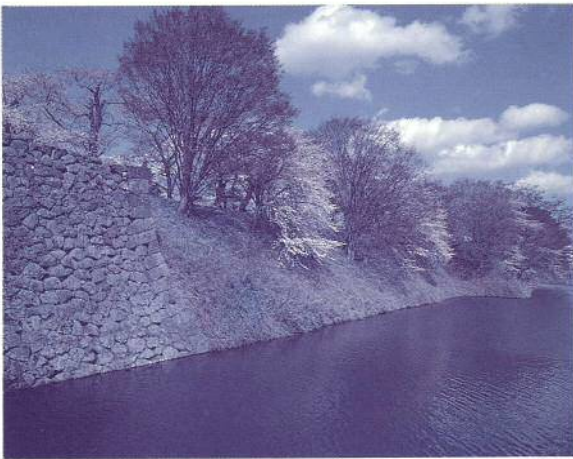
城址に照る日閑けく石垣の

高きに絡む蔦紅葉冴ゆ

城址の凍る雪踏み帰る夜半

出羽におし照る月清かなり

へ最上義光公勇戦之像



平成8年度の計画

義光公生誕四五〇年にあたって

山形の基礎を築いた最上義光公が生まれたのは、天文十五年（一五四六）。今年はもちろん四五〇年目にあたっていきます。

義光公は山形城を築き、城下町をつくり、交通路を整備し、新田を開発し、神社や寺院を修造し……と、山形の歴史のうえで最大の業績を残した人物といつてよいでしょう。

山形周辺ばかりではなく、庄内の水田開発や町づくりにも大きな貢献をしております。

「鶴岡」、「亀ヶ崎」（酒田市の中心部）などの地名も義光公が名づけたものです。

商工業者を優遇し、農民の年貢を低くするなど、最上義光は江戸時代はもちろん現在にいたるまで「名君」として語り継がれてきました。

特別企画展「最上義光の時代」

（仮題）

義光公の業績を、単なる武将としてではなく、山形を大きく発展させた政治家、経世家、文化人というように、多面的なとらえかたをしたい。それを目に見えぬ形にして、皆様方にご覧いただきたいものと、現在内容を検討中です。九月二十日開展を予定しております。

最上義光公をたまたえ（仮題）

義光公に関係のある史跡、寺社、古戦場などをめぐり、義光公の事績や人物に触れると共に、山形市の未来を語り合いつつ、懇親を深めようという「つどい」です。詳細は「広報やまがた」や新聞

紙上でお知らせする予定ですが、人数には制限があります。開催は、九月下旬になる見通しです。

つどい講座「最上義光と山形」

ことしも、社会科の先生方のご協力をいただいで開催します。学校が休みの十月二十六日（出）小学校五、六年生、中学生を対象として行います。

歴史講座

山形の歴史や、山形に残るすぐれた文化財について、広く学んでいただけるよう、企画を練っております。追って「広報やまがた」などを通してお知らせします。

霞城公園写生大会

生誕四五〇年記念と銘うって、山形市小・中学校の図工・美術部会と共催させていただきます。六月九日（日）を予定しています。

★お知らせとお願い

『最上氏に関心のある方』
『最上氏にゆかりのある方』

「一報くたせたい。」
義光公生誕四五〇年にあたり、右に記した方々のリストを作成しております。つぎのような要領でハガキでお知らせください。催し物の企画に生かしたいと考えております。

ご芳名	ご住所	電話番号	備考
			例）奥味がある、元家（奥味がた）など

〒990 山形市大手町1-53

（財）最上義光歴史館

《電話 25-7101》

新収蔵資料

鉄線時絵手箱 一括

内容品
油桶、鬚水入、鏡箱、化粧香合、櫛、刷毛、白粉箱、毛垂箱、他小箱

このたび、山形市三日町の豪商◎長谷川家から、同家伝来の化粧道具二点、義光書状一点が山形市に寄贈され、当館で収蔵することになりました。

化粧道具二点のうち、鉄線時絵手箱は高台寺時絵風の手法で全体に鉄線文様を配した手箱で、先にあげた同一意匠の収蔵品が収められます。

なお、箱書きには、「曾祖父鈴木図書亮妻直女 永禄五壬戌年八月持参之手箱也 鈴木对馬政基」とあり、伝来が記されているので、今後詳しく調査していきたいと思えます。



平成7年度のあゆみ

3	3	1	1	12	12	11	10	9	10	9	9	9	7	7	7	6	6	5	6	5					
26	25	26	13	31	24	24	14	25	29	20	18	9	30	28	22	25	19	18	22	4	2				
企画展「鉄と火と水と」 匠上林恒平展（入館者3391名）	火造り美演（5・5 入館者632名）	第1回理事会（第1・2回評議員会）	歴史探訪会（置賜・会津方面参加者40名）	東北芸工大、博物館実習（20名）	女性歴史セミナー「やまがた」参加者35名	運営懇談会	市制施行106周年記念無料開放日 入館者228名	歴史講演会「肖像画に見る戦国時代の人びと」	講師 国学院大学文学部長 文学博士 二木謙一氏	於 市民会館小ホール（参加者260名）	長谷堂城大手門復元作業（山辺町 勝村建設）	企画展「戦った男たちの岩」 （入館者4238名）	10・7 特別講話「戦国武将の祈り」渡辺信三先生	10・21 「やまがたの古城」伊藤清郎先生	義光公所用「三十八間金覆輪筋兜」他2点を名古屋城へ出張	資料整備検討委員会	つどい講座「土古城跡探検」 講師 山形南小校長 荒井政人先生ほか（参加者30名）	館内燻蒸作業	◎長谷川家より山形市へ資料寄贈「最上義光書状」他2点	板垣啓二理事長退任（相馬健一理事、理事長代行となる。）	生誕四五〇年フォーラム「最上義光を語る」	講師 横山 昭男氏、佐々木 悦氏、名子喜久雄氏、高橋 稜氏（参加者225名）	第2回理事会 第3回評議員会	「歴史館だより」第3号発行	第3回理事会 第4回評議員会

ご利用について

●開館時間 ●午前9：00から午後4：30
●入館料 ●一般 大人300円 高校生200円
●小中学生100円
●団体 大人240円 高校生160円
●小・中学生80円

●休館日 ●月曜日（国定休日の場合はその前日）
●12月29日から1月3日

●交 通 ●JR山形駅より徒歩15分
●大手町バス停留所より徒歩1分

山形市大手町1-53 TEL 0236-25-7101
FAX 0236-25-7102